

P-109 病変を有する卵管の存在が、体外受精の妊娠率・妊娠予後に与える影響について

琉球大, 沖縄県立那覇病院*

神山 茂, 島袋 美奈子, 伊波 忠, 正本 仁, 宮城博子, 稲福 薫, 佐久本 哲郎*, 東 政弘, 金澤 浩二,

【目的】 病変を有する卵管の存在が、体外受精の妊娠率及び流産率に影響するか否かについて検討した。【方法】 88.2-94.7の期間に当科にて施行した体外受精例のうち、子宮鏡による評価にて着床期子宮内膜が良好と判定された224例胚移植周期数419を対象とした。不妊因子によるその内訳は、卵管因子111例(卵管因子群),卵管以外の因子113例(非卵管因子群:男性因子54例,不明因子54例,頸管因子5例)である。卵管因子群111例中卵管水腫がある症例は25例(水腫群)であり、両側卵管切除症例を除く卵管水腫の無い症例は78例(非水腫群),両側卵管切除症例は8例(切除群)であった。【成績】 不妊因子別における胚移植当たりの妊娠率は、卵管因子群で13.6%,非卵管因子群で27.9%(男性因子31.8%,不明因子22.4%,頸管因子42.9%)であり、前者が有意($p<0.01$)に低率であった。流産率は、卵管因子群で21.1%,非卵管因子群で10.3%(男性因子9.5%,不明因子6.7%,頸管因子33.3%)であり、有意差は無いが前者が高い傾向にあった。卵管の状態別にみると、胚移植当たりの妊娠率は水腫群,非水腫群,切除群において各々15.5%,13.0%,13.8%であり、水腫の有無で有意差は無かった。流産率を同様に見ると各々44.4%,16.0%,0%であり、有意差は無いが水腫群で高い傾向にあった。【結論】 体外受精症例において、卵管因子群は非卵管因子群に比し妊娠率が有意に低く、流産率は高い傾向にあった。卵管因子群でみると水腫群は非水腫群に比し妊娠率に有意差は無いが、流産率は2.8倍と高い傾向にあった。切除群の妊娠4例からは流産例は無かった。以上より病変を有する卵管の存在が体外受精の妊娠及び妊娠予後に影響を与えることが示唆された。

P-110 MHカテーテルを用いた卵管開通術と実施上の要点

獨協医大越谷病院

林 雅敏, 沼口正英, 渡部秀樹, 堀中俊孝, 瀬川裕史, 三ツ矢和弘, 榎本英夫, 大蔵健義, 矢追良正

【目的】我々はバルーンおよびストッパーを付属した子宮カテーテル(IHカテーテル)を用いて卵管開通術(FTR)を行なってきたが、今回改良を加え、MHカテーテルを考案作製した。これを用いたFTRが卵管閉塞に有効な治療法であることおよびその実施上の要点を検討した。

【方法】MHカテーテルを外子宮口より挿入し、内・外子宮口部にバルーン・ストッパーを置き固定する。MHカテーテルを通して、6Fカテーテルを目的の卵管口に固定後、3Fカテーテルを閉塞卵管に挿入し開通させる。挿入困難例には6Fカテーテルが子宮の側壁に沿ったり、その近くを通って入ってしまい、卵管口に固定しづらいものがある。この場合6Fカテーテルの先端を指でJ字状に曲げ、子宮中央もしくは反対側から卵管口に誘導すると有効である。

【成績】8人の卵管閉塞のある不妊症患者にMHカテーテルを装着したところ、手技は容易で10卵管のうち7卵管が開通した。IHカテーテルのものも含めると27人の患者に施行し、42卵管のうち36卵管が開通した。そのうち4人が妊娠し、2人が経腔分娩、1人が帝王切開にて正常児を得、1人が異常なく妊娠継続中である。挿入困難例の多くは、6Fカテーテルを目的の卵管口に固定できない場合である。6Fカテーテルが挿入困難ルートをとった時、直ちに挿入容易なルートに変更するとX線被曝時間を短縮できる。

【結論】我々の作製したMHカテーテルを患者に装着しFTRを施行したところ、手技は容易で高率に卵管を開通できた。また6Fカテーテルの挿入困難ルートと容易なルートを知っておくことが重要である。